

舞え舞え蝸牛

新落窪物語

田辺聖子

舞え舞え蝸牛

新・落窪物語

田辺聖子

文藝春秋

田辺聖子（たなべ・せいこ）

1928（昭和3）年3月27日、大阪に生まれる。
1947年、樟蔭女子専門学校国文科を卒業。放送作家などを経て、1964年、「感傷旅行」で第50回芥川賞を受賞。著書に、「女の長風呂」「イブのおくれ毛」「文車日記」「甘い関係」「私的生活」「隼別王子の叛乱」「ああカモカのおっちゃん」「浜辺先生 町を行く」など多数。

舞え舞え蝸牛 かたつばし

——新・落窪物語

昭和五十二年九月十五日 第一刷
昭和五十三年十月一日 第二刷

定価 八九〇円

著者 田辺聖子

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話（〇三）二六五・一二二

印刷 共同印刷

製本所 大口製本

万一、落丁乱丁の場合は
お取替致します

© Seiko Tanabe 1977

Printed in Japan

舞え舞え蝸牛——新・落窪物語／目次

第一章 おちくぼ姫

5

第二章 夜の黒髪

53

第三章 恋の罪人

100

第四章 奸計

163

第五章 大団円

229

あとがき

252

A · D 装 画
坂 田 秋
政 野
則 卓
美

舞え舞え蝸牛かたつぶり

——新・落窪物語

第一章 おちくぼ姫

萩の咲きこぼれている繁みから身を伸ばして、しきりに部屋のうちをうかがっている、若い男がいる。

年のころはたちほど、この年齢にありがちな、小ずるそんな中にも、どこやら間の抜けた顔つきである。肩のあたりの色が褪せた、浅葱色の水干、裾が埃で白っぽくなった指貫、それも色目さえさだかでなく、ぬりの剝けた小刀を一本腰にして、垢じみた首のうしろには、ニキビなど出しているといった風態の青年である。

彼は、勾欄のもとへ近寄り、格子をあげたほのぐらい室内をうかがう。このあたりは、人けもない。簀子の縁も、風に吹き払われる御簾も、何だか古びて、荒れた感

じである。

清少納言は「枕草子」の中で、

「人にあなどられ、軽んじられるもの」のくだりに、

「家の北おもて」

をあげている。

北側といえ、つまり、家の裏側である。

王朝時代のこのころは、貴族の邸宅は、南おもてを正面とする。

北は、裏側というか、現代風にいえば勝手口というか……下人たちのすむ下屋も、北に設けられる。

りっぱなお邸でも、裏へまわると、むさくるしいもの、日常生活の臭いなどがみちているものである。清少納言はそのために、「家の北おもて」を見て、取りすました貴顕の生活の、裏側をのぞくような気がしたのだろう。

いま、若者のうかがっているこのあたりも、中納言・源忠頼卿のりっぱな邸宅の、北のはずれなのである。

この裏庭には、落葉や塵芥が掃きよせられてうずたかくなっていたり、また窪みに雨水がたまって枯葉が降りつむに任せてあったりする。

木々は枝をおどろおどろしく繁らせ、すすきがひとむら、ほほけた穂先を風になびかせている。人に見られる場所でもなし、と、手入れもせずうちすてであるのだらう。

若者はしやがれ声をひそめて、

「阿漕さん——阿漕さん」

と呼ぶ。

すると、簀子の縁の端の、妻戸が開いて十八、九の姿のいい女が出て来た。髪の高い、色白の、身のこなしが生き生きして、はしっこそうな女である。小ざっぱりした蘇芳色の桂の裾をさばきながら、つかつかとやってきた。そうして、男を見おろし、軽蔑したようにすけすけいう。

「また来たの、性こりもなく……。あんたの用なんか、わかってるわ。なんべん来てもムダってもんよ。さつさとお帰り」

「まあ、そう嫌うなつて」

若者は、阿漕には弱いとみえて、そう無残に言われても怒る様子もなく、顔を赤らめてにやにやする。いや、

阿漕という女が、意地わるくすればするほど、若者は心奪われて、呆けたように見とれているのである。

「阿漕さん、たのむよ。おれのご主人の恋文を、あんたの女あるじのお姫さまに手渡ししてくれよ。お返事はいいから渡すだけ……」

「だめだって、なんべんいつたらわかるの、大丸のぼんくら」

阿漕は、可愛いらしい顔立ちをしているくせに、言うことばは辛辣である。

「お姫さまは決してお受けとりにならないわよ。あんたのご主人、典薬の助に、帰ってお言い。五十をすぎた中年男のくせに、花もさかりの十七のお姫さまに求愛するなんて、身のほど知らずっていうもんだわ、おまけに典薬の助なんて、身分ちがいというものよ。こちらのお姫さまは、いやしくも、中納言さまの姫君なのよ」

「だけど、さ……」

大丸は、阿漕の顔にみとれながら、強いて反駁する。

何か、返事をしゃべっていれば、そのあいだだけでも、好きな阿漕の顔を見ていられるのだ。

「ご主人の典薬の助さまは、ずいぶんむつかしい病氣もおおしてさ、名医という評判なんだ。高貴な方のお邸へも出入りして、身分からいえば同じ位だよ。——それに、こちらのお姫さまは、中納言の姫君といつても、いまの北の方が生んだ姫君ではないんだらう？　いうなら、まま子の姫君なので、このお邸での待遇は、実子の姫君より格段に粗末だという噂じゃないか。まま母にいじめられてるよりは、典薬の助さまの北の方になられた方が、いくら幸わせたか、知れはしない」

「バカ、バカ、犬丸のバカ！　おだまり！」

阿漕はくやしそうに叫んだ。

「お姫さまはね、ほかの姫君たちより、お血筋は尊いんですよ。亡くなられた母君は、宮さまのおんむすめだったんだから。——それに」

阿漕は、イーをするように、下唇をつき出して、

「典薬の助の北の方が笑わせるわよ。あの助平爺は、ちやーんともう妻子をもつてるじゃないの、あつかましい」

「だって、男だもの——男が、一人の妻ですむもんか。

身分のある男はみな、何人も妻をもつのが、今の世間の常識じゃないか」

犬丸はふしぎそうにいう。

「お前みたいなバカには、いったって分りやしない」

阿漕は鼻であしらって、

「お姫さまは、そんな男と結婚なさらないんだから——。あたしが、決して、おさせしないわ。お姫さまだけを、たった一人の妻として愛して下さる殿方を、みつけてさしあげるのよ」

阿漕が言いすてて去ろうとすると、犬丸は勾欄のあいだから手をのばして、裾をとらえ、なさけなさそうな声になった。

「阿漕さん、それなら、おれはあんたにびったり、だぜ——おれなら、終生、あんたを一人の妻として誓うがなあ」

犬丸はべそをかいて哀願する。

阿漕は思わず、ふき出した。

「犬丸ののろま。そこをお放し。お前、主人の使いで来たと思ったら、自分もついでに売りこんでいくのか

い？」

「怒らないでくれよ、おれ、真剣なんだから……。これが、ほどほどの懸想、つてもんじゃないか。典薬の助さまは姫君に、おれはあんたに。ねえ、阿漕さん」

犬丸は、あわれっぽくいいながら、じつはこんな男に限って、わりあい粘りづよく図々しいのである。

顔がひよこゆがむほど、勾欄にくっつけて、

「あんた、おれのことを無教養もの、と軽蔑してるんじゃないか。おれだって、歌の一つぐらいは詠めるんだ。

——「くれないの、はつ花染めの色ふかく、想いし心、われ忘れめや」……わかるかい、この心。わからなきや、お姫さまにきいてみな。誓うよ、これはおれの初恋なんだよ……」

「バカ、いやらしい、主人が主人なら、下男も下男だよ、お前さんたちはそろって色きちがいだね。お放しつたら！」

阿漕は身をかがめて、青年のあたまを思いきり、紙扇でびしりと叩いた。

扇の骨が当ってかなりこたえたとみえ、

「あいた！」

と犬丸は思わず、両手であたまを防ぐ。

「ひどいじゃないか……そんなに意地わるをするのではないだろう。女のくせに男をどやしつけるなんて、あんまりだよ……」

「あたしをみくびると、ひどいことになるよ。あたしは世間並みのお人よしの女じゃないんだから」

「わかりましたよ、これだけ、どやされば骨身にこたえるよ。でも……」

と犬丸は、さっさと妻戸へはいるとする阿漕を追いかけて、

「考えといておくれよ、ねえ、阿漕さん……。このごろ、町ではやつてる歌、知らないかなあ。『小車にしきの紐といて、宵入に忍ばせ、わが背子よ——』ってんだ。とてもいい、ふしまわしで、おれ拍子とって歌うの、うまいんだ。酒一、二合とたべもの持ってくるから、今夜、忍んできてもいいかなあ……」

「きざったらしい、いやみな奴。お帰リッ。帰らないと水をぶっかけるよ。しッ、しッ」

「まるで、野良犬みたいにいうなよ」

「お前の名は、犬丸じゃないか」

「待ってくれよ、あッあッ、阿漕さん……」

縁へよりすがろうとする犬丸に目もくれず、阿漕は妻戸へ入って、かけ金をばちんとかけた。そうして、姫君の部屋へいそぐ。

姫君は、部屋いっぱい布地をひろげて、縫物に夢中だった。

「まあ。朝からずうっと、お仕事でございますか。そう、根をおつめになると、おからだに障りますわ」

「でも、お母さまが、たいそうせかしていられたから……」

姫君は、やつと手をやすめ、阿漕をみあげる。——なんと、美しい姫君だろう。

髪がまず、めでたく長い。

そうして多すぎるくらいである。豊かに肩から背へなだれ落ち、衣の裾に渦巻いて、立てば身丈にあまるであらう。

髪の長いのが美人、という、この頃の風からすれば、

それだけでももう、美女といっていいが、珠をみがいたような白い面輪の、可憐な、品よい美しさ。そうして、ほっそりした、何か幸うすい運命を思わせる、はかなげな軀つき。

それはまるで、朝日が当たると、露のように消えてしまいはせぬか、というような、あえかな美しさである。影が薄い風情、といってもよい。そのため、姫君の美しさに、高貴なおもむきが添ってはいるが、年齢にしては暗い、さびしい感じである。

ただ、ふと動く姫君の表情に、もし順境に生い立っていたら、もつと陽気に、年齢相応の華やかさが漂っていたらう、と思わせるものがある。

姫君の本性は、あかるくてほがらかなのかもしれないが、現在のような生活の中では、なんの希望ものしみもないのである。

(陰気に、暗い気分になってしまわれるのは、むりないわ……)

と、阿漕は同情し、姫君のために、あらゆるものに対して腹をたてている。

姫君に言い寄る、いやらしい五十男の典葉の助にも、
(自分に言い寄る、犬丸は黙殺するとしても) 姫君の継
母の北の方にも。

しかし、典葉の助はともかく、北の方は、この邸の家
刀目であり、実力者であり、当主の中納言の殿でさえ、
あたまが上らぬ存在なのだから、召使いの阿漕などが、
面と向っていえない。

自然に声をひそめ、

「北の方さまが、いくら、おせかしになってもそこは適
当になさいまし。お姫さまがあまり従順に、なんでもは
いはい、ということをお聞きになるので、つけあがつて、
次から次と仕事を持ってこられるのですわ。——あんな
りです。まるで、これでは、お姫さまが召使いのようで
す」

「阿漕。お母さまのことは、わるくいわないでおくれ。
わたくしが聞き辛いわ」

「だって……」

と勝気な阿漕は、いったん言い出すと、このへんで、
とおさえることができない。

「殿さまの姫君、という点では、みな同じなのに、北の
方さまの姫君たちは、あんなに蝶よ花よ、と大事にお育
てになって。この前の、三の君さまのご結婚のにぎやか
なことは、どうでした？ それなのに、お姫さまは、殿
のおん子の数にも入らず、こんなみすばらしい部屋で、
着るものもたべるものも差別せられて、おまけに、ご姉
妹や、その婿君のお衣裳を縫うのが役目なんて。いくら
ご自分の実子でないからといって、北の方さまのなされ
かたは、あんなりですわ」

「寒くなってきたわ。阿漕、格子をおろして……」

「これは、うっかりいたしました。そのつもりでまいり
ましたのに」

阿漕はいそいで、格子をおろしてまわる。戸外はまだ
あかるいが、もう室内は物の隈が濃くなっていて、秋の
日暮れは早いのだった。

阿漕は小さい灯をつけた。

姫君は、ようやく倦み疲れたように、裁ちもの台によ
りかかり、ほうっと息をついている。

それにしても、この部屋の、なんとみすばらしいこと。

はずれの部屋の、しかも、ここは、床の落ち窪んだ、土間のような低い部屋なのだった。

そのため、北の方はじめ、邸の者は、姫君のことを侮蔑的に、

「落窪の君」

と呼んでいる。

阿漕は、それを聞くと、腹が立つてならない。姫君に向かって、なんという無礼なあだなだろう。

「君」と呼ばせているのは、さすがに北の方が、父親の中納言をはばかりて、わずかに召使いと区別しているのだが、それでも、上に「おちくぼ」などという、ばかにした言葉があるので、よけい屈辱的にひびく。

中納言は、この姫君を、途中から引きとったので、さほど情愛もわかないのか、すべて北の方の宰領にまかせているので、姫君の扱いは、北の方の心ひとつである。

せめて、姫君に、しっかりしたおとなの、乳母か、母方の近親者でもいらしたら、こんなむごい待遇は受けられなかったろうに——と、阿漕は思う。

阿漕は、姫君の亡き母上が生きていられたところから、

身近にお仕えしていた召使いだった。

姫君と、年も近いので、姉妹のような情感があつて、二人はしっかりと心が結ばれていた。

阿漕は姫君を何よりの宝と大切に思い、姫君は阿漕をこの世でただ一人の頼りにする者、と信頼している。

ところが、この阿漕が、姿かたちが美しく、気も利いているのに目をつけて、北の方が、三の君づきの侍女に使うようになった。

阿漕は、姫君よりほかの人に仕えたくないのである。この姫君といつまでも一緒にいようと思えばこそ、叔母や、そのほかの人々が、よそのつとめ口を紹介してくれても、決して、いとまはとらなかつたのである。姫君が、ひとり心ぼそそうな様子でいるのを見すてて、にぎやかな三の君の、新婚の女あるじに仕えることなどできない。姫君は、そんな阿漕をなぐさめて、

「同じ邸の内なのですもの、あちらもこちらと同じじゃないの。……それに、ここでは着るものも粗末で、お前がかわいそうだったけれど、あちらへいけば、お前の着物もきれいにしてもらえるし、かえってわたくしは嬉し

いわ……」

阿漕は、姫君のやさしい心遣いに感動して、決心した。三の君に仕えよう。北の方の愛する三の君のもとでは、羽振りがよいので、うまくたちまわって、着るもの食べるもののおこぼれを、くすねることができるかもしれない、と思ったのである。

それは自分のためではない、姫君のためである。

それほど姫君はさしせまつて、物質的に窮迫した暮らしなのである。

着物でさえ、まるで阿漕とでは、どちらが召使いか分らない。阿漕の方は、人前に出す侍女だからというので、小綺麗な袴（くま）を北の方から支給されている。

しかし姫君は古ぼけた白のままの単衣に、着古してすりきれた、色あせた袴、ほそ肩は寒そうに震えていて、若い姫君というより、まるで貧家の老婆のような姿だった。

この落窪の部屋にあるものは、すべてみな、古びてすりきれ、ほころびたものばかり、北の方が、邸の中のすたれもの、お下りなどを姫君に与えるのである。

姫君は縫物がきわめて上手なので、それらを巧みにつづくり合せて身にまとっているのである。

着るものもさりながら、調度や、家具らしいものも見当らない。風をふせぐ几帳や、屏風さえ、ないのだ。

北の方は

「どうせ人前に出ないのだから、身なりにかまわなくてよい。また、落窪の間に、客を通すはずもなし、調度を飾るのは要らぬことです」

というのである。

「追い追い、お寒くなりますから、私がどこから、几帳を調達してまいりますわ……今年の春、ここに一つあった几帳さえ、北の方さまが持っていておしまいになった……そのくせ、西の対（かた）や東の対のお姫さまたちのお部屋には、蒔絵の厨子（ずし）だの、沈（ひん）の火桶だのと、それは結構なお道具が、腐るほどあるのですよ。なのに、こちらには、ひとつも下さらない。物惜しみに強欲で……」

阿漕が口をひらけば、北の方のわるくちになる。

「もう、お止し。ぐちゃ、わるくちは、言うほどに、自分を傷つけるわ。——たのしいことだけ話しましょうよ

……三の君の婿君、というのはどんな殿方？ すばらしい方？」

と姫君は、若い女性らしい好奇心を、おさえかねるようにきく。

「そうでございますね、美男子でいらして、蔵人の少将という高いご身分にふさわしい、りっぱな威厳のあるかたですわ」

「まあ」

姫君は、うっとりとして、視線を宙にさまよわせた。姫君にとつては、阿漕のもたらす噂話が、唯一の世間への窓口なのであった。

それに、さかしくて、はしっこい阿漕のことなので、観察も描写もするどくて、姫君は、彼女としやべっている、楽しく面白い。

阿漕が日頃、目をかけている女童の、露という十二、三ばかりの子が、

「お夕食を持ってまいりました。お姫さま」

と、そっとふすまの外からいう。

阿漕は、三の君のところに仕えていても、心はいつも

姫君のそばにあって、間がなすぎがな、姫君のもとへ来て世話をし、気にかけている。それと同じように、露も、北の方や西の対の姫君たちの目をぬすんで、姫君のために心を砕いているのである。

この子は、無邪気な少女で、やさしい姫君になつていくのである。

「あたたかい、あつものがございます。雉の肉のあつものでございますよ。台所の婢女におあいそをいって、わけてもらいました」

と露は得意そうである。

「それはよくやったわね」

阿漕がほめて、

「せっかくの露の心づくしでございますから、冷めないうちにお召しあがりなさいませ。雉の肉は体があたたまって、夜もよくおやすみになれましょう」

と、姫君の前へ、一本足の高坏を据えた。

姫君はうれしそうに箸をとった。

「お前たちのおかげで、つつがなく生きていられるのだわ。お礼を申しますよ」

「もったいないことを仰せられます。ほんとなら、お姫さまはご身分からいっても、多くの人々に大切にかしずかれていらっしやるはずなのに……」

と阿漕はいいかけたが、自分の氣を引き立てるように話を変えた。

「蔵人の少将は、お年は二十四、とか。三の君さまとはお似合いですが……」

「ですが、なに？」

「どちらもお氣が強くて、わがままなご性格らしくて、そこもお似合い。口げんかなさるといい勝負で、聞いてると面白くて」

「まあ、阿漕ったら」

姫君はあつものの椀の、熱さをてのひらにいとおしむように持ちつつんで、ひとくち、ふたくち飲む。

「あつくて、おいしいわ……」

とにつこり、する。そうすると、姫君の白い頬に、ほのぼのと血がのぼって、紅味がさす。それをみると阿漕は、姫君がいじらしくてたまらず、もっとおいしいものを食べさせてさしあげたくなる。

そうして、つくづくと姫君を拝見して、決して身びいきというのではないが、三の君や四の君よりも、こちらの姫君のほうが、どれだけ美しくていらっしやるか、わからないと思う。

姫君は世間づきあいもなならず、（北の方がさせないで押しこめていいるからである）そのため、世の人に、姫君の美貌は知られないのだけれど、でも、西の対や東の対の女房の中には、姫君の美しさを惜しがる者も多いのだ。

そのとき、遠くはなれた母屋の部屋で

「阿漕！ 阿漕はどこ？」

と呼ぶ声がある。北の方の大声である。

「そら、お呼びになった、次はあたしだわ」

と露がとびあがった。

果して、

「露！ どこへいった？ また、落窪の間へいつていると承知しないよ、この忙がしいときに！ 露！」

と腹立たしげな声が、だんだん近づいてくる。露はあわてて、出ていく。